



Title	外国人多住地域の教育と国際交流活動：第3部 混成保育の実態と父母の意識：第9章 混成保育に関する外国人の父母の意識
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 19, 115-128
Issue Date	2002-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/22648
Type	bulletin (article)
File Information	19_P115-128.pdf



[Instructions for use](#)

第9章 混成保育に関する外国人の父母の意識

第1節 親子の基本属性

A保育所には合わせて23人の外国籍の子どもが通っている。彼らの父母に対するアンケート調査の結果、有効回答を得たのは18組で、全体の78.3%になる。このアンケート調査の結果から、保育所に子どもを預けている父母の生活と意識について明らかにしていこう。

まずはじめに、表9-1から対象者が預けている子どもの基本属性について見てみると、18人中11人がブラジル国籍、7人がペルー国籍となっている。ブラジル国籍の子は男子6人、女子5人で男女半々、ペルー国籍の子は男子6人、女子1人である。ブラジル国籍の子が2歳から6歳まで各年齢に数名ずつ、ペルー国籍の子が3歳、4歳、6歳に数名ずつという年齢構成である。このように、国籍、年齢、性別にばらつきがあるものの、そのほとんどが日本で生まれている。母国で生まれたのはブラジル国籍の③、ペルー国籍の⑫⑮の3人しかいない。ちなみに、③は0歳、⑫が2歳、⑮が5歳時に来日している。

父母は、両方またはいずれか一方が日系人で、2世と3世が多い(表9-2)。3人(⑧⑨⑩)以外は家族全員が日本に居住し、子どもを含めて3~6人家族で生活している。日本にやってきたのは10年以上前の父母が多く、父親で11人、母親で10人となっている(表9-3)。5年未満は4年前の⑧の父母と10ヶ月前の⑮の父母しかおらず、滞日歴の長い者が中心になっている。日本で「家族で暮らす」ようになった年が来日の年と同じ場合が多く、家族で来日したパターンが主流である。ただし、彼らはただちに大泉に来住したわけではない。来日年と大泉来住年が同じ者は②⑤⑥⑧⑮⑰の父母と⑦の父だけであり、多くの者が日本国内の移動を経験した後に大泉に来住している。

彼らの学歴は母親に大卒が多いという傾向があるものの、全体としてはばらつきが大きい(表9-4)。男性では中卒から大学院卒まで満遍なく存在している。母親の場合、中卒と大学院卒は存在せず、8人が大卒、5人が高卒、専門学校卒、短大卒が各2人となっている。そのため、ブラジルにいた時の職業もばらつきが大きく、父親の場合、管理職、公務員、販売員、事務、エンジニア、母親の場合、公務員、教員、銀行員、事務、主婦と多彩である。学生だった者も存在する(表9-5)。しかし、日本での現職はきわめて似通ったものとなり、父母ともにほとんどが工員になっている。それ以外は、事務員や販売員が数名いる程度である。その結果、世帯年収も似通っている。共働きにもかかわらず、200万円~400万円未満が7世帯、200万円未満が4世帯で、400万円未満の世帯が11世帯となり、回答のあった15世帯のほとんどを占めている。

表9-1 対象子の基本属性

国籍	No	性別	年齢	出生地	来日時の 子の年齢
ブラジル	①	女	6歳	日本	-
	②	男	6歳	日本	-
	③	男	6歳	ブラジル	0
	④	女	5歳	日本	-
	⑤	女	4歳	日本	-
	⑥	男	5歳	日本	-
	⑦	男	5歳	日本	-
	⑧	女	3歳	日本	-
	⑨	男	4歳	日本	-
	⑩	女	2歳	日本	-
	⑪	男	3歳	日本	-
ペルー	⑫	男	4歳	ペルー	2
	⑬	男	4歳	日本	-
	⑭	男	6歳	日本	-
	⑮	女	6歳	ペルー	5
	⑯	男	3歳	日本	-
	⑰	男	3歳	日本	-
	⑱	男	3歳	日本	-
	⑲	男	3歳	日本	-

表9-2 父母のエスニシティと家族

国籍	No	父		母		同居 家族	ブラジル 在住家族
		日系人か	何世	日系人か	何世		
ブラジル	①	日系人	2	日系人	3	4	0
	②	日系人	3	日系人	2	4	0
	③	日系人	3	日系人	2	3	0
	④	日系人	2	日系人	2	3	0
	⑤	日系人	2	日系人	3	4	0
	⑥	日系人	2	日系人	1	5	0
	⑦	日系人	2	日系人	3	4	0
	⑧	ブラジル人	-	日系人	2	4	2
	⑨	日系人	2	日系人	2	4	2
	⑩	日系人	2	日系人	2	5	0
	⑪	日系人	2	ドイツ人	-	3	1
ペルー	⑫	ペルー人	2	日系人	2	4	0
	⑬	無回答	-	日系人	3	3	0
	⑭	日系人	1	ペルー人	-	4	0
	⑮	ペルー人	-	日系人	3	6	0
	⑯	日系人	2	日系人	3	3	0
	⑰	無回答	-	日系人	2	4	0
	⑱	無回答	-	日系人	2	4	0

表9-3 大泉町来住までの経緯

国籍	No	初 来 日		家族で暮らす		大泉来住	
		父	母	父	母	父	母
ブラジル	①	6年前	6年前	6年前	6年前	6年前	6年前
	②	10年前	10年前	10年前	10年前	10年前	10年前
	③	11年前	11年前	9年前	9年前	5年前	5年前
	④	11年前	11年前	10年前	10年前	7年前	7年前
	⑤	12年前	11年前	10年前	10年前	12年前	11年前
	⑥	11年前	11年前	11年前	11年前	11年前	11年前
	⑦	13年前	7年前	無回答	無回答	13年前	6年前
	⑧	4年前	4年前	4年前	4年前	4年前	4年前
	⑨	12年前	12年前	11年前	11年前	8年前	8年前
	⑩	12年前	12年前	6年前	6年前	3年前	3年前
	⑪	6年前	6年前	6年前	6年前	4年前	4年前
ペルー	⑫	10年前	10年前	10年前	10年前	2年前	2年前
	⑬	無回答	10年前	無回答	7年前	無回答	7年前
	⑭	10年前	8年前	無回答	無回答	無回答	無回答
	⑮	10ヶ月前	10ヶ月前	10ヶ月前	10ヶ月前	10ヶ月前	10ヶ月前
	⑯	10年前	10年前	10年前	10年前	4年前	4年前
	⑰	無回答	9年前	無回答	9年前	無回答	9年前
	⑱	無回答	8年前	無回答	無回答	無回答	6年前

表9-4 父母の学歴

国籍	No	父	母
ブラジル	①	高校	高校
	②	専門学校	高校
	③	専門学校	大学
	④	高校	大学
	⑤	短大	短大
	⑥	大学	高校
	⑦	無回答	無回答
	⑧	高校	高校
	⑨	中学校	大学
	⑩	大学	大学
	⑪	大学院	大
ペルー	⑫	大学	大学
	⑬	無回答	学
	⑭	高校	学門
	⑮	短大	短大
	⑯	短大	高校
	⑰	無回答	大
	⑱	大学院	学門
中学校	1		
高校	4	5	
専門学校	2	2	
短大	3	2	
大学	3	8	
大学院	2		

表9-5 父母のブラジルにいた時の職業と現職および世帯年収

国籍	No	父		母		世帯年収
		ブラジルにいた時	現 職	ブラジルにいた時	現 職	
ブラジル	①	無回答	無回答	事務	工員	200万円未満
	②	その他	工員	銀行員	工員	200万円～400万円未満
	③	管理職	工員/通訳・翻訳	その他	工員/通訳・翻訳	600万円～800万円未満
	④	その他	工員	学生	工員	400万円～600万円未満
	⑤	学生	工員	事務	工員	400万円～600万円未満
	⑥	管理職	事務員	その他	工員	無回答
	⑦	学生	販売員	学生	事務員	200万円未満
	⑧	公務員	工員	公務員	工員	200万円～400万円未満
	⑨	事務	工員	公務員	工員	200万円～400万円未満
	⑩	エンジニア	事務員	その他	事務員	400万円～600万円未満
	⑪	公務員/教員/銀行員	工員	学生	工員	無回答
ペルー	⑫	学生	工員	学生	工員	200万円～400万円未満
	⑬	無回答	無回答	その他	工員	200万円～400万円未満
	⑭	その他	工員	その他	無回答	200万円未満
	⑮	販売員	工員	主婦	工員	無回答
	⑯	公務員	工員	学生	事務員	200万円～400万円未満
	⑰	事務	工員	公務員	工員/販売員	200万円～400万円未満
	⑱	自営業	工員	教員/事務/その他	工員	200万円未満

第2節 親子のコミュニケーションと言語獲得上の問題

こうした特徴をもつ親子のコミュニケーションを表9-6から見ると、父母ともに比較的密に子どもと接していることがわかる。無回答の者を除くと「平日遊ぶ」「休日遊ぶ」「夕食を一緒に食べる」「保育所のことを話す」のいずれにおいても、父母ともに「よくする」「ときどきする」がほとんどである。これに当てはまらないのは、⑨の父が「保育所の話しをする」で「あまりしない」と答えているのみである。

その際、もっぱら日本語でコミュニケーションを行うのは、表9-7のように、②の父母、⑮⑯の母のみで、他の父母はポルトガル語、スペイン語か日本語とそれらの言語の併用という形をとっている。ほとんどの子どもが、家庭と保育所の間で、言語環境のズレをもっている。とくに、⑧⑨は父母ともにポルトガル語のみ、⑫⑬⑰⑱は父母ともにスペイン語になっており、これらの父母の子どもの場合、家庭と保育所でのコミュニケーション言語の違いが常態化している。

表9-6 対象子とのコミュニケーション

国籍	No	父				母						
		平遊	日ぶ	休遊	日ぶ	夕食を一緒に食べる	保育所の事を話す	平遊	日ぶ	休遊	日ぶ	夕食を一緒に食べる
ブル	①	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
	②	2	2	1	1	2	2	1	1			
	③	1	0	1	1	1	0	1	1			
	④	1	0	1	1	1	0	1	1			
	⑤	1	1	1	1	1	1	1	1			
	⑥	2	1	1	1	2	1	1	1			
	⑦	0	2	0	0	2	2	2	2			
	⑧	1	0	1	1	1	0	1	1			
	⑨	2	1	1	3	2	1	1	1			
	⑩	1	1	2	1	1	1	1	1			
	⑪	1	0	1	1	1	0	1	1			
ベル	⑫	2	1	1	1	2	1	1	1			
	⑬	1	2	2	1	1	2	1	1			
	⑭	0	0	0	0	0	0	0	0			
	⑮	0	1	0	1	1	0	1	1			
	⑯	2	1	1	2	2	1	1	1			
	⑰	1	1	1	1	2	2	1	1			
	⑱	0	1	1	1	0	1	1	1			

[凡例]

- 1:よくする 2:ときどきする 3:あまりしない
 4:まったくしない 0:不明・無回答

表9-7 子どもと主に何語で話すか

国籍	No	父	母
ブル	①	無回答	日本語とポルトガル語
	②	日本語	日本語
	③	ポルトガル語	日本語とポルトガル語
	④	日本語とポルトガル語	ポルトガル語
	⑤	日本語とポルトガル語	日本語とポルトガル語
	⑥	日本語とポルトガル語	ポルトガル語
	⑦	日本語とポルトガル語	ポルトガル語
	⑧	ポルトガル語	ポルトガル語
	⑨	ポルトガル語	ポルトガル語
	⑩	日本語とポルトガル語	日本語とポルトガル語
	⑪	日本語とポルトガル語	日本語とポルトガル語
ベル	⑫	スペイン語	スペイン語
	⑬	日本語とスペイン語	日本語とスペイン語
	⑭	スペイン語	スペイン語
	⑮	日本語とスペイン語	日本語
	⑯	日本語とスペイン語	日本語
	⑰	スペイン語	スペイン語
	⑱	スペイン語	スペイン語

しかも、18人中16人が3歳前後からこの保育所に預けられ、基礎的な言語獲得が完了する前に複数の言語環境のもとに置かれている（表9-8）。そうした状況が、長く続けば、基礎的な言語獲得の上で問題が生じる可能性があり、保育所や家庭内でのコミュニケーションに影響を与える可能性もある。事実、2年以上通っている者が11人おり、延長保育を利用している者も5人いる。中には①のように9ヶ月から預けられ、すでに5年以上この保育所に通っている子どももいる。また、家庭と保育所で異なる言語環境が常態化している⑨や⑰のように、1歳未満という言語獲得以前からこの保育所に預けられ、すでに2～3年間保育所に通っている子どももいる。そのため、保育所でも家庭でもこの問題に注目する必要がある。

子どもが日本語を学び、ポルトガル語（母国語）しか使用できない父母とコミュニケーションがうまくいかなくなるという問題は、すでに少なからぬ研究者から指摘されている。調査対象者たちの中で、こうした指摘が現実化する可能性をもつ者が少なくないと思われる。だが、同時に、ここで見られた事実は、それだけでなく、子ども自身の基礎的な言語の獲得という点でも検討すべき問題が存在することを示唆して

表9-8 保育所へ預け始めた年齢・延長保育とそれ以前の保育所

種	No	預け始めた年齢	延長保育		それ以前の保育所
			週何回	週時間	
ブ	①	9ヶ月	0	—	ブラジル人の託児所
	②	1歳11ヶ月	5	7時間30分	通わせていない
ラ	③	2歳 6ヶ月	0	—	ブラジル人の託児所
	④	3歳	0	—	通わせていない
ジ	⑤	1歳 6ヶ月	6	不明	通わせていない
	⑥	10ヶ月	0	—	通わせていない
ル	⑦	2歳 6ヶ月	0	—	通わせていない
	⑧	3歳 1ヶ月	0	—	ブラジル人の託児所
ル	⑨	5ヶ月	0	—	通わせていない
	⑩	1歳 7ヶ月	0	—	通わせていない
	⑪	2歳10ヶ月	5	3時間45分	ブラジル人の託児所
ベ	⑫	3歳	5	45時間	通わせていない
	⑬	2歳	5	5時間	ブラジル人の託児所
ル	⑭	6歳	0	—	日本の別の保育所
	⑮	5歳	4	2時間	通わせていない
ル	⑯	10ヶ月	0	—	通わせていない
	⑰	4ヶ月	0	—	通わせていない
	⑱	1歳 3ヶ月	0	—	通わせていない

表9-9 日本の保育所に通わせる理由（複数回答）

理 由	父	母
保育料が安いから	3 (16.7)	4 (22.2)
保育時間が長いから	5 (27.8)	4 (22.2)
保育士が親切だから	6 (33.3)	7 (38.9)
園の保育内容が気に入ったから	5 (27.8)	10 (55.6)
日本語を覚えさせたいから	12 (66.7)	14 (77.8)
行事が楽しいから	6 (33.3)	12 (66.7)
自分も日本人と仲良くしたいから	2 (11.1)	4 (22.2)
家の近所だから	9 (50.0)	11 (61.1)
日本にずっとすむつもりだから	4 (22.2)	5 (27.8)
子どものうちから日本文化に触れさせたいから	8 (44.4)	10 (55.6)
子どもに日本人の友達を作らせたいから	1 (5.6)	5 (27.8)
その他	1 (5.6)	2 (11.1)
無回答	5 (27.8)	0 (0.0)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

いる。それは、いいかえれば、子どもたちにとっての母語とは何か、また母語の獲得にとってふさわしい環境とは何かという問題に他ならない。

ただし、日本の保育所に通わせる理由を見ると（表9-9）、父母ともに、「日本語を覚えさせたいから」がもっとも多い。父親が12人（66.7%）、母親が14人（77.8%）となっている。「保育料が安いから」「保育時間が長いから」等は必ずしも多くない。この地域ではすでにブラジル人の託児所が存在しており、対象子の中には、かつてブラジル人の託児所へ預けられていた者もいる。したがって、この保育所に子どもを預けているのは、複数の選択肢の中から親が主体的に選んだ結果である。つまり、親の意識としては、なによりもまず日本語の獲得を目的に、子どもたちを日本の保育所に預けたのだといえる。しかし、その目的が家庭と保育所での言語環境の違いの中で達成されるためには、日常的な配慮が必要になることは間違いない。こうした配慮が欠けると、すでに指摘した問題が顕在化する可能性がある。

ところで、「日本語を覚えさせたいから」という目的は、必ずしも彼らが日本に定住しようという考え方と結びついているわけではない。「日本にずっとすむつもりだから」という理由でわが子を日本の保育所に通わせている者は父親が4人、母親が5人で、父母ともに3割に満たない。また、「子どもに日本人の友達を作らせたいから」という考え方とも結びついていない。母親の方が父親より子どもを預ける理由として「子どもに日本人の友達を作らせたいから」をあげる者が多いが、そのように答える母親は5人（27.8%）しかいない。父親に至っては、1人（5.6%）のみである。もちろん、「自分も日本人と仲良くした

いから」という理由をあげる者も父親で2人(11.1%)、母親で4人(22.2%)しかいない。したがって、「日本語を覚えさせたいから」というのは、日本に居住することを前提にした考え方ではないし、親子とも日本人と交流するためでもない。むしろ、そこにあるのは、子どもの将来にとって日本語という言語が一つのスキルとして意味をもつという考え方ではないだろうか。

第3節 保育所の現実的機能と保育所への父母の関わり方

では、実際に子どもを保育所に預けることによって、子どもや家庭ではどのような変化が生じたのだろうか。表9-10をみると、父親の場合、7人が無回答であり、「子どもに日本人の友達ができ」「子どもの日本語が上手になった」をあげる者が8人、7人と多いこと、母親の場合、「子どもの日本語が上手になった」が10人、「親自身が日本語習得の必要性を感じるようになった」「子どもに日本人の友達ができ」がともに9人でいずれも過半数に達し、「母国の文化を伝えるように心がけるようになった」「家庭でも日本語を使うようになった」も7人、6人と比較的多いことが特徴的である。

ここから、第1に、もともと子どもを保育所に預ける目的であった日本語の習得に関しては、父母ともに確実にそれが達成されつつあると評価していることがわかる。しかし、第2に、父母ともに目的としては必ずしも重視していなかったが、子どもに日本人の友達ができることも現実の変化として認めている。事実、すべての子どもに日本人の友達ができ、その親に対して父母自身「あいさつ程度」のコミュニケーションをとるようになってきている(表9-11)。それにもなると、第3に、一方で自分自身も日本語を学ぶ必要性を感じたり、実際に日本語を学んだりする母親と他方でできるだけ母国の文化を伝えるように心がける母親が生まれるようになってきている。子どもたちが日本語を習得し日本人の友達を獲得して、いわば「日本人」化が進む状況の中で、そうした状況に対する相異なる反応が母親自身の中に生まれているといってもよい。ただし、第4に、父親にとっては、子どもの変化は自らの考え方を変えるほど大きな意味をもっていない。無回答の者も多く、母親のような変化はあまり見られない。すでに見た子どもとのコミュ

表9-10 保育所に預けてからの家庭の変化(複数回答)

変 化	父	母
子どもの日本語が上手になった	7 (38.9)	10 (55.6)
親自身が日本語習得の必要性を感じるようになった	4 (22.2)	9 (50.0)
子どもに日本人の友達ができ	8 (44.4)	9 (50.0)
保育所を通じ日本人の親とつきあうようになった	2 (11.1)	4 (22.2)
文化の違いにとまどうことが多くなった	1 (5.6)	3 (16.7)
家庭でも日本語を使うようになった	3 (16.7)	6 (33.3)
家庭でも日本の生活習慣を取り入れるようになった	4 (22.2)	4 (22.2)
母国の文化を伝えるよう心がけるようになった	3 (16.7)	7 (38.9)
何も変わらない	1 (5.6)	2 (11.1)
無回答	7 (38.9)	1 (5.6)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

表9-11 子どもの日本人の友達

種	No	友達の有無	友達とのつきあい	
			父	母
ブ	①	いる	無回答	4
	②	いる	3	3
	③	いる	2	1
ラ	④	いる	2	2
	⑤	いる	1	1
	⑥	いる	2	2
ジ	⑦	いる	無回答	2
	⑧	いる	2	2
	⑨	いる	2	無回答
ル	⑩	いる	無回答	2
	⑪	いる	無回答	1
	⑫	いる	2	2
ベ	⑬	いる	無回答	2
	⑭	いる	4	4
	⑮	いる	2	2
ル	⑯	いる	3	2
	⑰	いる	2	1
	⑱	いる	3	2
合	1		1	4
	2		8	10
	3		3	1
	4		1	2

[凡例]

- 1:よくしゃべる
- 2:あいさつ程度
- 3:あまりない
- 4:まったくない

表9-12 保育士との連絡

種	No	父	母
ブ ラ ジ ル	①	無回答	1
	②	1	1
	③	無回答	1
	④	2	2
	⑤	1	1
	⑥	1	2
	⑦	無回答	3
	⑧	3	2
	⑨	1	2
	⑩	無回答	2
	⑪	2	2
べ ル い	⑫	1	1
	⑬	1	1
	⑭	無回答	2
	⑮	2	無回答
	⑯	無回答	2
	⑰	2	2
合 計	1	6	6
	2	4	10
	3	3	1

【凡例】

- 1：うまくできている
2：だいたいできている
3：あまりできていない

表9-13 保育士との相談内容（複数回答）

相 談 内 容	相談したこと		これから相談したいこと	
	父	母	父	母
子どもの育て方について	5 (27.8)	10 (55.6)	4 (22.2)	8 (44.4)
子どもの発達についての問題	4 (22.2)	7 (38.9)	5 (27.8)	7 (38.9)
保育所の保育内容について	1 (5.6)	6 (33.3)	3 (16.7)	6 (33.3)
保育士の子どもへの接し方について	1 (5.6)	4 (22.2)	4 (22.2)	8 (44.4)
日本人の親とのつきあい方について	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.6)	1 (5.6)
子どもと日本人の子どもの仲について	1 (5.6)	3 (16.7)	3 (16.7)	3 (16.7)
相談することはない	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (16.7)	2 (11.1)
無回答	12 (66.7)	8 (44.4)	9 (50.0)	5 (27.8)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)	18 (100.0)	18 (100.0)

ニケーションのあり方は父母ともに、あまり変わりがなかったが、実際には、母親が子育ての中心であり、母子の方が父子よりも日常的に深く強い関係性をもっていることを物語っている。

それでは、父母と保育士との関係はどうかであるのか。この点について、まず表9-12から保育士との連絡がうまくできているかどうかを尋ねた結果を見ると、父親は無回答の者が多く、母親は「だいたいできている」「うまくできている」が多いことがわかる。保育士との相談に関しても、同様な傾向が見られる（表9-13）。父親は18人中12人がこれまでの相談内容について無回答であり、今後のことについても9人が無回答、3人が「相談することはない」と答えている。母親の相談内容は、「子どもの育て方について」が10人、「子どもの発達について」の問題が7人、「保育所の保育内容について」が6人、今後相談したことも同じような内容が上位になっている。ここから、子育てに関する悩みを抱える母親が多いことがわかる。ただし、今後相談したい内容では、「保育士の子どもへの接し方について」も8人と増えており、これまでは相談できなかったができれば相談したいものもあることがうかがえる。

これらの結果をふまえると、第1に、保育士とコミュニケーションをとる機会は母親中心のものとなっていることが明らかになる。母親が子育ての中心であることがこうした事実の背後に存在していると考えられる。第2に、母親を中心とした保育士とのコミュニケーションは、彼女たちが家庭の中で日本語をあまり使っていないことを考えると、必ずしも十分に日本語ができなくても可能であることが予想できる。第3に、それゆえに高度で深い内容を伝達する上では少なからぬ支障が出てくる可能性がある。そのため、すでに見たように、母親自身が日本語を学ぶ必要性を感じるようになると思われる。これまでの相談内容では少なかったものの、今後相談したい内容として「保育士の子どもへの接し方について」が比較的多くの母親からあげられているのも、ある程度の水準まで日本語ができなければ、互いの信頼関係を崩しかねないような相談はできないという判断が働いていると考えることもできる。

母親たちは、保育所の行事にも「よく参加している」と答えている（表9-14）。「よく参加している」と答えた母親は11人おり、「時々参加する」者を加えると、17人に達する。当然、父親の場合、その比率は低下する。だが、保護者会への出席になると、父親だけでなく母親も消極的になる。保護者会に「参加しない」者は、父母ともに8人に達し、「ほとんど参加しない」を加えると、父親が9人、母親が10人となる。しかも、これ以外に無回答の者も父親で4人、母親で2人おり、実際に参加する者は父母ともに少数派

となっている。そのため、保護者会に対する要望自体、あまり出てこない（表9-15）。6人の母親が「言葉がわかるよう配慮してほしい」と答えているのが目につく程度である。したがって、ここにも「言葉の壁」が少なからぬ制約要因になっていることがうかがえる。

しかし、このことは、保育所に対して訴えたいことがないことを意味してはいない。表9-16のように、母親を中心に「保育料をもっと安くしてほしい」「保育士がポルトガル語を身につけてほしい」「保育時間を長くしてほしい」等の保育所に対する要望は少なくない。にもかかわらず、保護者会に参加して、こうした要望を訴える機会は少ない。

ただし、それは「言葉の壁」だけでなく、そうした壁を乗り越えてまで解決すべき問題だととらえられていないということかもしれない。なぜなら、保育所に対して様々な要望をもっているにもかかわらず、「保育所への満足度」を尋ねると（表9-17）、5人の無回答の父を除くすべての父母が「満足している」「どちらかといえば満足」と答えているからである。しかも、そのうち「満足している」父母の方がそれぞれ8人、11人と多い。様々な要望はあるにしても、少なくとも現状では保育所に満足している傾向が強い。そのため、「言葉の壁」をのりこえ、保護者会などで保育所に対する要望を訴える行動が生まれにくいのだと考えられる。

表9-14 保育所の行事・保護者会への参加

種	No	行 事		保護者会	
		父	母	父	母
ブ	①	無回答	1	無回答	3
	②	2	2	4	4
	③	2	1	2	2
ラ	④	2	2	無回答	無回答
	⑤	1	1	1	1
	⑥	2	2	4	4
ジ	⑦	無回答	2	4	4
	⑧	3	2	4	4
	⑨	3	1	2	2
ル	⑩	2	1	3	3
	⑪	1	1	1	1
ハ	⑫	1	1	2	4
	⑬	2	1	4	1
	⑭	4	4	4	4
ル	⑮	2	2	4	4
	⑯	2	1	4	1
イ	⑰	2	1	無回答	無回答
	⑱	無回答	1	無回答	4
計	1	3	11	2	4
	2	9	6	3	2
	3	2		1	2
	4	1	1	8	8

【凡例】

- 1：よく参加する
- 2：時々参加する
- 3：ほとんど参加しない
- 4：参加しない

表9-15 保護者会に対する要望（複数回答）

要 望	父	母
時間・開催日をもっと考慮してほしい	3 (16.7)	2 (11.1)
言葉がわかるよう配慮してほしい	4 (22.2)	6 (33.3)
気軽に参加できる雰囲気を作ってほしい	2 (11.1)	4 (22.2)
もっと楽しい企画にしてほしい	2 (11.1)	4 (22.2)
保護者会をできるだけ簡素化してほしい	2 (11.1)	4 (22.2)
今のままで問題ない	1 (5.6)	5 (27.8)
その他	0 (0.0)	1 (5.6)
無回答	10 (55.6)	3 (16.7)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

表9-16 保育所に対する要望（複数回答）

要 望	父	母
もっと熱心やってほしい	3 (16.7)	7 (38.9)
保育士が少しポルトガル語を身につけてほしい	5 (27.8)	8 (44.4)
日本語をもっと教えてほしい	4 (22.2)	6 (33.3)
お便りをポルトガル語にしてほしい	1 (5.6)	3 (16.7)
規則を厳しくしないでほしい	0 (0.0)	2 (11.1)
国籍の違いに対する差別のないように配慮してほしい	4 (22.2)	7 (38.9)
保育時間を長くしてほしい	5 (27.8)	8 (44.4)
保育について相談しやすくしてほしい	2 (11.1)	2 (11.1)
保育士ともっと連絡を取り合いたい	4 (22.2)	5 (27.8)
保育料をもっと安くしてほしい	7 (38.9)	9 (50.0)
特にない	1 (5.6)	3 (16.7)
その他	0 (0.0)	1 (5.6)
無回答	7 (38.9)	1 (5.6)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

表9-17 保育所への満足度

	No	父	母
ブ	①	無回答	2
	②	2	2
ラ	③	1	1
	④	1	1
	⑤	1	1
ジ	⑥	2	2
	⑦	無回答	2
ル	⑧	1	1
	⑨	1	2
	⑩	無回答	1
ベ	⑪	2	2
	⑫	1	1
	⑬	無回答	1
ル	⑭	1	1
	⑮	1	1
ト	⑯	2	1
	⑰	2	1
計	⑱	無回答	2
	1	8	11
	2	5	7
	3		
	4		

[凡例]

- 1：満足している
- 2：どちらかといえば満足
- 3：どちらかといえば不満
- 4：不満

第4節 父母同士のコミュニケーションと保育所に対する評価

一方、日本人の父母とのコミュニケーションについて見てみると（表9-18）、保育士に対する以上に、関係が希薄になる。父親は無回答が多い上に、日本人の父母とは「あいさつする程度」の関係であると答える者が9人で、「必要な時だけ話す」は4人にすぎない。当然、「家の行き来がある」は皆無である。この点に関しては、母親もほぼ同様で、「あいさつする程度」が11人、「必要な時だけ話す」が6人で、「家の行き来がある」人はいない。中には、「ほとんど話さない」と答える者も1人いる。もちろん、今後のことについて尋ねると、父母ともに「家の行き来ができるほど仲良くなりたい」と答える者が父母ともに増加し、半数前後に達する（表9-19）。しかし、そうした答えとコミュニケーションの実態とは大きくかけ離れているのが現実である。

これとは対照的に、保育所の子どもを預けているブラジル人同士（ないし同国人同士）のコミュニケーションは、表9-20のように父母ともに日本人との場合よりも強くなる。そして、そうしたコミュニケーションを基盤にして、今後さらにコミュニケーションを深めていこうとする志向性をもっている。

ただし、このことは日常生活において、ブラジル人同士（ないし同国人同士）だけで生活していることを意味してはいない。表9-21からわかるように、父母ともにほとんど全員が日本人と「職場で共に働いている」。しかも、日本人を「家に招いたことがある」、「レジャーを共に楽しんだ」ことがある者も少なからず存在する。その傾向は母親により強く見られ、いずれも半数以上がそうした経験をもっている。この結果は、われわれがすでに実施したブラジル人調査結果と比べても、高い数値である。それだけ、この保育所に子どもを預けている親たちは、当地域のブラジル人一般と比べ、日常生活の中で日本人と接触し、コミュニケーションを取っている者が多いといえる。それにもかかわらず、保育所に子どもを預けている親たちとは深いつきあいがないのである。保育所に子どもを預けることは、子どもたちにとっては日本人と外国人の違いをこえたコミュニケーションの深化の契機になるが、大人同士の場合、そうした契機にはなりにくいと考えられる。

それでは、このような現実の中で、日本の保育所に子どもを預けていることについて、彼ら／彼女らはどのような意識をもっているのであろうか。この点について、いくつかの質問に対する回答から検討して

表9-18 日本人とのコミュニケーション

種	No	父	母
ブ	①	無回答	2
	②	3	3
	③	3	3
ラ	④	3	3
	⑤	2	2
	⑥	2	2
ジ	⑦	無回答	3
	⑧	3	3
	⑨	2	3
ル	⑩	無回答	2
	⑪	2	3
べ	⑫	3	3
	⑬	無回答	4
	⑭	3	3
	⑮	3	3
	⑯	3	2
	⑰	3	2
ル	⑱	無回答	3
	⑲	無回答	3
合	1		
	2	4	6
	3	9	11
	4		1
	5		
計			

【凡例】

- 1：家の行き来がある
- 2：必要なときだけ話す
- 3：あいさつする程度
- 4：ほとんど話さない
- 5：全然話さない

表9-19 日本人との今後のつきあい

種	No	父	母
ブ	①	無回答	2
	②	2	2
	③	1	1
ラ	④	無回答	無回答
	⑤	1	1
	⑥	1	1
ジ	⑦	無回答	1
	⑧	1	1
	⑨	1	1
ル	⑩	無回答	1
	⑪	無回答	無回答
べ	⑫	3	3
	⑬	無回答	2
	⑭	無回答	無回答
	⑮	1	1
	⑯	1	1
	⑰	2	2
ル	⑱	無回答	2
	⑲	無回答	2
合	1	7	9
	2	2	5
	3	1	1
	4		
	5		
計			

【凡例】

- 1：家の行き来ができるほど仲良くしたい
- 2：必要な時だけつき合いたい
- 3：あいさつする程度でいい
- 4：あまりつき合いたくない
- 5：つき合わなくてもいい

表9-20 同国人同士の間

種	No	父	母
ブ	①	無回答	2
	②	3	3
	③	1	1
ラ	④	2	1
	⑤	1	1
	⑥	1	1
ジ	⑦	無回答	2
	⑧	2	2
	⑨	2	2
ル	⑩	無回答	1
	⑪	1	1
べ	⑫	2	2
	⑬	無回答	1
	⑭	5	5
	⑮	1	1
	⑯	2	2
	⑰	3	2
ル	⑱	無回答	1
	⑲	無回答	1
合	1	5	9
	2	5	7
	3	2	1
	4		
	5	1	1
計			

【凡例】

- 1：よく連絡を取り合っている
- 2：必要に応じて話す
- 3：あいさつする程度
- 4：ほとんどつながりはない
- 5：全く交流はない

表9-21 日常生活における日本人との関わり

種	No	職場で共に働いている		家に招いたことがある		レジャーを共に楽しんだ		共にボランティアをやっている		日本語を学んでいる	
		父	母	父	母	父	母	父	母	父	母
ブ	①	無回答	1	無回答	1	無回答	1	無回答	1	無回答	1
	②	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2
	③	1	1	無回答	1	1	1	無回答	無回答	無回答	1
ラ	④	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
	⑤	1	1	1	1	1	1	無回答	無回答	無回答	無回答
	⑥	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2
ジ	⑦	無回答	2	無回答	2	無回答	2	無回答	2	無回答	2
	⑧	1	1	2	2	2	2	2	2	1	1
	⑨	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
ル	⑩	無回答	無回答	無回答	1	無回答	1	無回答	無回答	無回答	無回答
	⑪	1	1	1	1	1	1	無回答	無回答	1	1
べ	⑫	1	1	無回答	無回答	1	1	無回答	無回答	無回答	無回答
	⑬	無回答	1	無回答	無回答	無回答	1	無回答	1	無回答	無回答
	⑭	1	2	2	2	2	2	2	2	無回答	無回答
	⑮	1	1	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答
	⑯	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2
	⑰	1	1	2	1	2	2	1	1	2	1
ル	⑱	1	1	2	2	2	1	2	2	1	2
	⑲	1	1	2	2	2	1	2	2	1	2
合	1	14	15	5	9	7	12	2	4	3	5
	2		2	6	6	6	5	7	8	6	7
計											

【凡例】 1：はい 2：いいえ

表9-22 子どもが日本語・日本文化を身につけることに対する評価

種	No	日本語		日本文化	
		父	母	父	母
ブ	①	無回答	1	無回答	2
	②	1	2	1	2
	③	1	1	1	1
ラ	④	1	1	1	1
	⑤	1	1	1	1
	⑥	1	1	1	1
ジ	⑦	2	2	無回答	2
	⑧	1	1	1	1
	⑨	1	1	1	1
ル	⑩	無回答	2	2	無回答
	⑪	1	1	1	1
へ	⑫	1	1	1	1
	⑬	無回答	1	無回答	1
	⑭	2	1	2	2
ル	⑮	2	2	2	2
	⑯	1	1	1	1
ル	⑰	無回答	2	無回答	2
	⑱	1	1	無回答	2
計	1	1	1	1	1
	2	3	5	3	7
	3				
	4				

[凡例]

- 1：とてもよい
- 2：どちらかといえばよい
- 3：あまりよくない
- 4：よくない

みよう。

まず、日本の保育所に通う子どもが日本語・日本文化を身につけることに対してどのような考え方を持っているかについてまとめてみると、表9-22のようになる。ここから、父母ともにきわめて肯定的に評価していることが浮き彫りになる。日本語・日本文化のいずれについても、父母ともに否定的な評価をする者はまったく存在しない。肯定的な評価をする者の内訳を見ても、父母ともに、10人～13人ときわめて多くの者が「とてもよい」と答えている。もちろん、このことは、すでに見たように、そもそも日本語や日本文化を学ばせることを目的として自らの子どもを日本の保育所に預けていることにもとづいている。いいかえれば、ブラジル人の託児所と日本の保育所という選択肢のうち後者を選び取った人々が調査対象者になっていることを反映しているにすぎない。決して、当地に住むブラジル人の多くがこうした考え方をもっているわけではない。にもかかわらず、この結果は重要な意味をもつ。なぜなら、彼らが子どもを日本の保育所に預けているのは、何らかの事情でやむをえず行われている行為としては考えられないこと、それゆえ子どもたちが日本語や日本文化を学んでいるからといってそれを一方的な「同化」として批判することはできないことを意味しているからである。少なくとも、彼らが自らの子どもを保育所に預けているのは自らの教育戦略にそった主体的な選択に他ならないということである。

そのため、「日本の保育所ではブラジル人の子も日本語を使うべき」という設問に否定的な意見をもつ父母は皆無である（表9-23）。しかも、「ブラジル人と日本人の子どもを一緒に保育すること」に関して、「子どもの国際的な視野が広がる」という見方にほとんどの父母が肯定的な意見をもっている。「自分の子には日本人の子と積極的に交流してほしい」という考え方にもほとんどの父母が賛成し、「自分の子には日本人の子とあまり深くつきあってほしくない」という考え方には反対している。

だからといって、自らの子どもが「日本人」化することに対して、一定の危惧を持つようになっていることも否定できない事実である。表9-24のように、「日本の保育所に預けていることに対する不安」として、半数（9人）の母親と7人の父親が「母国に戻った時に適応できなくなる」と答え、7人の母親が「ボ

表9-23 ブラジル人と日本人の子どもをいっしょに保育することに関する意見

種	No	子どもの国際的な視野が広がる		自分の子はブラジル人だと強く感じる		日本の保育所ではブラジル人の子も日本語を使うべき		日本の保育所でブラジル人の子がポルトガル語を使うのは当然		日本の保育所でもポルトガル語の教育をすべき		自分の子には日本人の子と積極的に交流してほしい		自分の子には日本人の子とあまり深くつきあってほしくない		
		父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	
ブラジル	①	無回答	2	無回答	3	無回答	2	無回答	2	無回答	2	無回答	2	無回答	3	
	②	2	2	3	3	1	1	3	3	3	1	2	2	4	4	
	③	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	4	
	④	1	1	無回答	無回答	2	2	無回答	無回答	3	3	2	2	3	3	
	⑤	1	1	3	3	1	1	3	3	1	1	1	1	4	4	
	⑥	4	4	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	
	⑦	4	無回答	3	3	2	2	4	4	1	1	3	3	4	4	
	⑧	1	1	2	2	1	1	2	2	1	1	1	1	4	4	
	⑨	1	1	2	2	1	1	3	3	2	2	2	2	3	3	
	⑩	無回答	2	無回答	3	3	無回答	1	無回答	3	無回答	4	無回答	2	無回答	4
	⑪	無回答	2	無回答	2	2	無回答	1	無回答	2	無回答	1	無回答	2	無回答	2
ベール	⑫	1	1	1	1	1	1	3	3	4	4	2	2	3	3	
	⑬	無回答	1	3	3	2	2	3	3	2	2	1	1	4	4	
	⑭	2	2	2	2	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	1	1	無回答	無回答	
	⑮	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	⑯	1	1	1	1	1	1	3	3	2	2	1	1	4	4	
	⑰	1	1	2	2	1	1	2	2	無回答	4	無回答	2	3	3	
	⑱	2	2	2	2	2	2	3	1	3	3	2	2	3	4	
	合計	9	10	3	3	9	11	2	3	5	7	7	7			
2	3	6	6	7	5	6	3	5	4	5	6	10	1	2		
3		6	5	7			7	7	3	2	1	1	6	6		
4	2	1					1	1	1	3			7	9		

[凡例] 1:まったくその通り 2:どちらかといえばそう思う 3:あまりそう思わない 4:まったくそう思わない

表9-24 日本の保育所に預けていることに対する不安(複数回答)

不安	父	母
ポルトガル語を忘れそう	5 (27.8)	7 (38.9)
日本文化ばかりが身につく	1 (5.6)	3 (16.7)
ブラジル人の友達ができない	1 (5.6)	1 (5.6)
母国に戻った時に適応できなくなる	7 (38.9)	9 (50.0)
子どもがブラジル人であることを忘れそう	2 (11.1)	2 (11.1)
不安はない	3 (16.7)	7 (38.9)
無回答	6 (33.3)	0 (0.0)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

ポルトガル語を忘れそう」と答えている。そのため、母親たちの多くは、「ポルトガル語をしっかり教え」（12人）たり、「ポルトガル語の映画、絵本を見せ」（11人）たりしている。「ブラジルの歴史、地理、文化」（③）や「習慣、国歌」（②）、「踊りや歌」（⑰）、「ブラジルのすばらしさ、町の美しさ、愉快な人柄」（⑤）などを教える者もいる。さらに、過半数の父母が「日本の保育所でもポルトガル語の教育をすべき」だと考え、半数の母親が「日本の保育所でブラジル人の子がポルトガル語を使うのは当然」と答えている。それは、過半数の父母がもっている「自分の子はブラジル人だと強く感じる」という感覚に裏打ちされている。

第5節 父母の子どもに対する期待と将来志向

こうして、父母たちは現実に進展する子どもの「日本人」化に危惧しながら、「日本語を覚えさせる」ために保育所へ通わせ続けている。そのうえ、表9-25のように、多くの父母が将来も日本の小学校へ通わせたいと考えている。10人の父と12人の母がそう答えており、日本のブラジル人学校やブラジルの小学校に通わせたいと考えているのは、それぞれ3人の父母にとどまっている。それは、「進学に有利だから」「文化を身につけられるから」「言葉を身につけられるから」という理由からである（表9-26）。とくに、

表9-25 通わせたい小学校とその理由

購	No	父	母
ブ	①	無回答	1
	②	3	3
	③	1	1
ラ	④	2	2
	⑤	1	1
	⑥	1	1
ジ	⑦	2	2
	⑧	1	1
	⑨	2	2
ル	⑩	3	3
	⑪	1	1
	⑫	1	1
ベ	⑬	無回答	1
	⑭	1	1
	⑮	1	1
ル	⑯	1	1
	⑰	1	1
	⑱	3	3
合	1	10	12
	2	3	3
	3	3	3

【凡例】

- 1：日本の小学校
- 2：日本のブラジル人学校
- 3：ブラジルの小学校

表9-26 その小学校に通わせる理由（複数回答）

理 由	父	母
日本に定住したいから	4 (22.2)	5 (27.8)
将来帰国したいから	7 (38.9)	8 (44.4)
職業につながりやすいから	3 (16.7)	3 (16.7)
進学に有利だから	10 (55.6)	13 (72.2)
文化を身につけられるから	8 (44.4)	11 (61.1)
言葉を身につけられるから	8 (44.4)	10 (55.6)
日本人の友達ができるから	3 (16.7)	5 (27.8)
ブラジル人の友達ができるから	1 (5.6)	2 (11.1)
学費の問題があるから	1 (5.6)	1 (5.6)
規則が子どもに合うから	3 (16.7)	3 (16.7)
学習レベルが合っているから	2 (11.1)	3 (16.7)
その他	1 (5.6)	0 (0.0)
無回答	5 (27.8)	1 (5.6)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

「進学に有利だから」をあげる者が父母ともに飛び抜けて高く、「文化」や「言葉」の習得もこの理由と結びついて考えられているようである。

「進学に有利だから」という理由がとくに多くの父母からあげられるのは、彼らがきわめて高い学歴期待をもっていることにもとづいている。事実、表9-27のように、1人の父親を除くすべての父母が大学以上の学歴期待をもっている。しかも、大学よりも大学院を望む者の方が父母ともにわずかに上回っている。彼らの学歴期待は、大学以上の学歴期待が4～5割、大学院の期待がほとんどない、同じ保育所に子どもを預けている日本人の父母のそれと比べ格段に高く強いものである（表9-28）。そのため、日本人に対して「教育熱心だ」と見ている者は少ない（表9-29）。ただし、同じ保育所に子どもを預けている日本人の父母から見れば、外国人は「教育熱心だ」とは考えられていない。外国人の日本人に対する見方以上に、外国人を「教育熱心だ」と見なす日本人の父母は少ない（表9-30）。そこには、教育観の違いが存在するといえる。

このように、彼らはきわめて高い学歴期待を背景にして、「進学に有利だから」ということで日本の小学校に自らの子どもを通わせようと考えている。しかしながら、このことは、彼らが日本に定住することを決めたことを意味していない（表9-31）。「とにかく日本に残りたいと思っている」者は⑤の父と①の母のみである。「よい仕事があったら」「日本の家族を連れてこられたら」「日本の習慣になれたら」という条件付きで「日本に残りたい」とする者もほとんどいない。多くは「母国の経済状態が改善したら」「母国の治安が安定したら」「お金が貯まったら」という条件つき帰国を考えている。ただし、日本にいる間は、「外国人にとって生活しやすい町だから」、大泉町に「住みたいと思う」者がほとんどである（表9-32、表9-33）。

条件付きではあるものの、帰国の意志をもちながら、「進学に有利だから」子どもに日本の小学校へ通わせようとしているのである。こうした志向性は、すでにわれわれが行った、日本の小中学校へ子どもを通わせているブラジル人に対する調査でも見られたものである。彼らの場合、日本とブラジルの教育制度の違いはあまり考慮されていないのが現状である。

表9-27 学歴期待

階級	No	父	母
ブラジル	①	無回答	大学院
	②	大学院	大学院
	③	大学院	大学院
	④	大学院	大学院
	⑤	大学院	大学院
	⑥	大学	大学
	⑦	無回答	無回答
	⑧	大学	大学
	⑨	大学	大学
	⑩	大学院	大学院
	⑪	大学院	大学院
専門大学院	⑫	大学	大学
	⑬	無回答	大学院
	⑭	大学	大学
	⑮	専門	大学
	⑯	大学院	大学
	⑰	大学院	大学院
合計	1	8	
	6	9	
	8	9	

表9-28 日本人父母の学歴期待

学歴	父	母
中学校	0 (0.0)	0 (0.0)
高校	8 (24.2)	14 (33.3)
専門学校	2 (6.1)	3 (7.1)
短大	2 (6.1)	4 (9.5)
大学	18 (54.5)	17 (40.5)
大学院	1 (3.0)	0 (0.0)
その他	1 (3.0)	2 (4.8)
無回答	1 (3.0)	2 (4.8)
合計	33 (100.0)	42 (100.0)

表9-29 日本人の教育姿勢

階級	No	父	母
ブラジル	①	無回答	2
	②	3	2
	③	1	1
	④	2	2
	⑤	2	2
	⑥	1	1
	⑦	3	無回答
	⑧	2	2
	⑨	2	2
	⑩	無回答	2
	⑪	3	3
ベラルーシ	⑫	2	2
	⑬	無回答	2
	⑭	3	3
	⑮	1	無回答
	⑯	無回答	無回答
	⑰	2	2
合計	1	3	2
	2	6	11
	3	4	2
	4		

表9-30 外国人の保護者の教育姿勢(実数・構成比)

内訳	父	母
教育熱心だ	5 (15.2)	8 (19.0)
どちらかといえば熱心だ	13 (39.4)	15 (35.7)
どちらかといえば無関心	5 (15.2)	10 (23.8)
全く無関心	3 (9.1)	0 (0.0)
無回答	7 (21.2)	9 (21.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

[凡例]

- 1 : 教育熱心だ
- 2 : どちらかといえば熱心
- 3 : どちらかといえば無関心
- 4 : 全く無関心

表9-31 日本への定住志向

内容	父	母
何があってもとにかく帰国する	3 (16.7)	6 (33.3)
母国の経済状態が改善したら帰国する	7 (38.9)	9 (50.0)
母国の治安が安定したら帰国する	4 (22.2)	5 (27.8)
お金が貯まったら帰国する	7 (38.9)	10 (55.6)
高齢になったら帰国する	1 (5.6)	1 (5.6)
とにかく日本に残りたいと思っている	1 (5.6)	1 (5.6)
よい仕事があったら日本に残りたい	2 (11.1)	2 (11.1)
日本に家族を連れてこられたら残りたい	0 (0.0)	1 (5.6)
日本の習慣になれたら日本に残りたい	2 (11.1)	1 (5.6)
その他	0 (0.0)	1 (5.6)
無回答	6 (33.3)	0 (0.0)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

表9-32 大泉町への居住志向

階級	No	父	母
ブラジル	①	無回答	1
	②	1	1
	③	1	1
	④	1	1
	⑤	1	1
	⑥	1	1
	⑦	無回答	1
	⑧	1	1
	⑨	1	1
	⑩	無回答	1
	⑪	4	4
ベラルーシ	⑫	1	1
	⑬	無回答	1
	⑭	4	4
	⑮	1	1
	⑯	4	2
	⑰	無回答	4
合計	1	10	14
	2		1
	4		
	3	3	

表9-33 大泉町への居住志向の理由(複数回答)

理由	父	母
外国人にとって働きやすい町だから	4 (22.2)	5 (27.8)
外国人にとって生活しやすい町だから	9 (50.0)	13 (72.2)
日系ブラジル人が多くて情報をえやすいから	5 (27.8)	8 (44.4)
日本人が外国人に親切だから	3 (16.7)	4 (22.2)
外国人にとって働きにくい町だから	2 (11.1)	2 (11.1)
外国人にとって生活しにくい町だから	1 (5.6)	1 (5.6)
日本人が外国人に親切でないから	1 (5.6)	1 (5.6)
無回答	7 (38.9)	0 (0.0)
データ数	18 (100.0)	18 (100.0)

[凡例]

- 1 : 住みたいと思う
- 2 : 別の場所に移りたい
- 3 : 必ず別の場所に移らなければならない
- 4 : わからない

以上のように、ブラジル人（ないしペルー人）は、やむをえず日本の保育所に子どもを預けているわけでも、託児の条件のみを考えて預けているわけでもない。むしろ、積極的に日本語や日本文化を学ばせるために預けているのである。しかも、将来の小学校の選択に関しても、そうした考え方は貫かれている。それを支えているのは父母の子どもに対する高い学歴期待と日本の学校に通わせることは進学に有利であるという判断である。

こうした目的から見て、子どもたちは基本的に順調に成長していると見てよい。日本語を着実に学んでいるからである。しかも、必ずしも意識的な目的でなかったが、日本人の友達もできるようになっている。にもかかわらず、あるいは、だからこそ、彼らは子どもたちの「日本人」化に不安を持つようになっているのである。それは、いずれは母国に帰国したいという将来志向にもとづいている。そこには、日本語を学ばせ、日本の保育所や小学校に通わせようとする自らの意志とは矛盾するアンビバレントな意識が垣間見られる。帰国の意志が変わらない限り、そうしたアンビバレントな意識は、客観的に定住化が進行すればするほど、より深く強いものになることは間違いない。その意味で、定住化と将来志向の動向に今後とも注目する必要がある。

(小内 透)